

7月19日（木）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さん WS 古典籍との出会い—土佐日記の紙の長さ—

1,1回目のご来館

公募を経て7月より新しく AIR としてないじえる芸術共創ラボに参加して下さることになった ^{りょうあせん}梁亜旋さんが、初めて来館されました。初回ということで、キャンベル館長から「想定していたことと違う展開になってゆくことを恐れずに、どんどん楽しんで挑戦して欲しい」と激励がありました。



2, はじめて古典籍に触れるワークショップ—日本・中国・朝鮮—

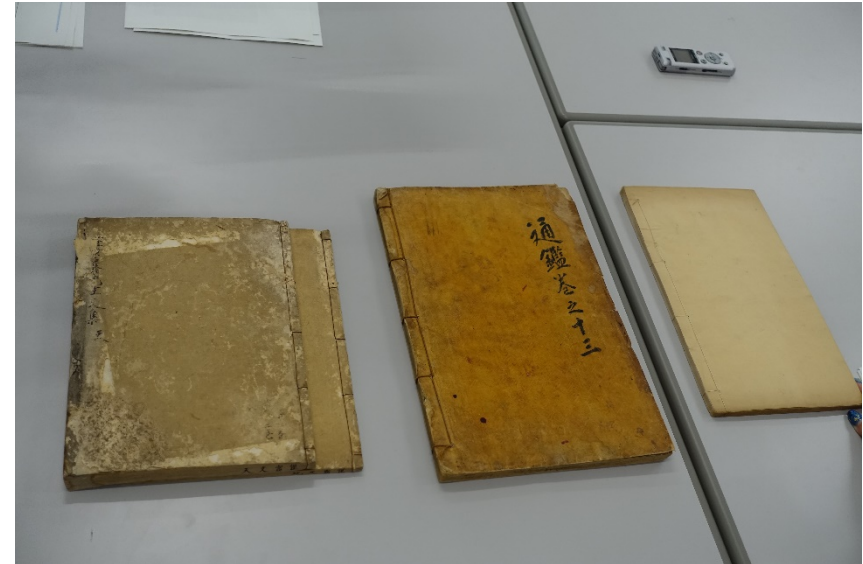
これまで日本の古典籍に触れたことがないという梁さん。

古い本のことに詳しい入口敦志先生（当館教授）が、日本だけでなく、中国や朝鮮の様々な古典籍資料を用いながら、形のこと、つくりかたのこと、国ごとの違いのことについてお話くださいました。

まずは大きさです。

日本、中国、朝鮮（韓国）の古典籍を比べると、中国や朝鮮のものがとても大きいのに気付きます。日本の本のなかでも大きなものを並べても、その違いは歴然です。

そして綴じ方。



7月19日（木）

すべて糸で袋綴にした本ですが、中国は四つ穴、朝鮮は五つ穴です。日本は四つ穴がメインですが、たまに五つ穴。中国と朝鮮の両方から影響を受けているということでしょうか。

日本で中国の典籍を出版する時に、表紙などを中国風に仕立てることがあります。こういった本を「唐本^{とうほん}仕立て」と呼ぶので、その当時から日本の本と中国の本を区別する意識があったということでしょう。



挿絵に注目しても、様々な違いがあります。江戸時代以降の日本の古典籍には、挿絵の入ったものが多いのにくらべ、中国や朝鮮には殆ど挿絵の入った本がないそうです。

このことは、本を読んでいた層や読書の目的が違うことを示します。江戸時代の日本は当時の水準からみると随分と識字率が高く、女性や子供も文字が読めたこと、その人たちが内容をよりよく理解できるためのツールとして絵がつかわれたこと、あるいは読書が娯楽だったこと……さまざまな要素が見えてきます。

古典籍の内容だけでなく、外側（見た目）にも、多くの情報が含まれているのですね。

2, はじめて古典籍に触れるワークショップ—内容と形式—

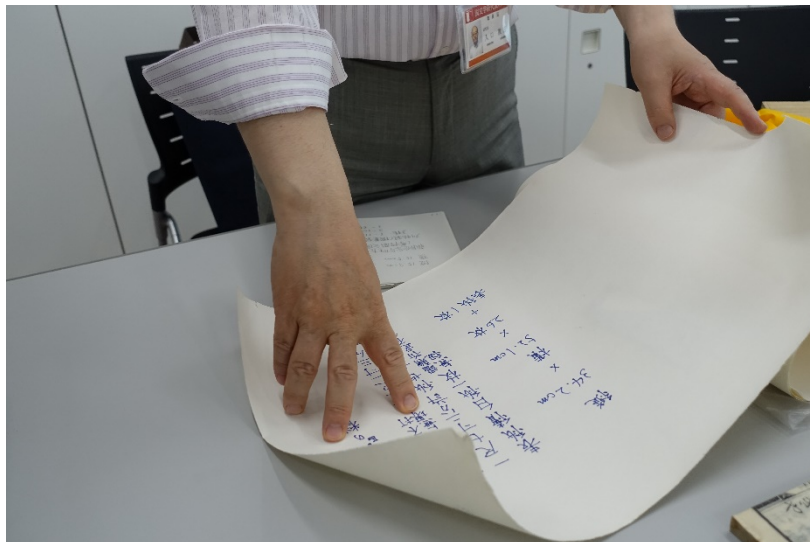
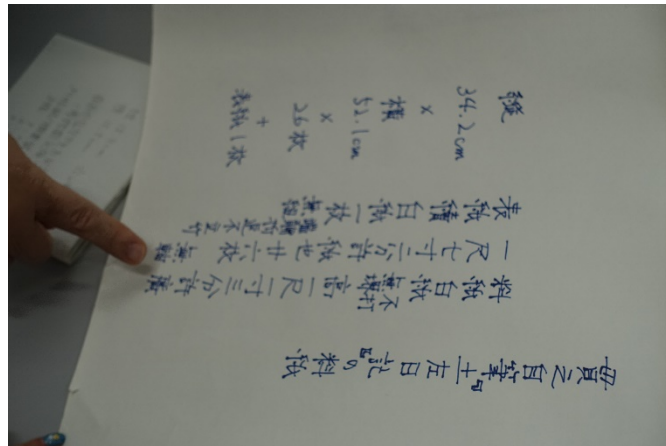
教科書にも載っていて有名な『土佐日記』（承平五年〈935〉頃成立か）。

今読まれているものは活字になったテキストがほとんどですが、これは元々どのような形の紙に書かれていたのでしょうか。

紀貫之直筆の『土佐日記』に関する情報を、藤原定家が書き残しています。それに拠ると、縦 34.2 cm×横 52.1 cmの紙 26 枚にわたって書かれていたらしいのです（+ 1 枚の表紙を添える）。

結構な大きさの紙ですが、これを繋げるとどれくらいの長さになるのでしょうか。単純に計算すると 1,354.6 cmになりますが、それって具体的にどの位？

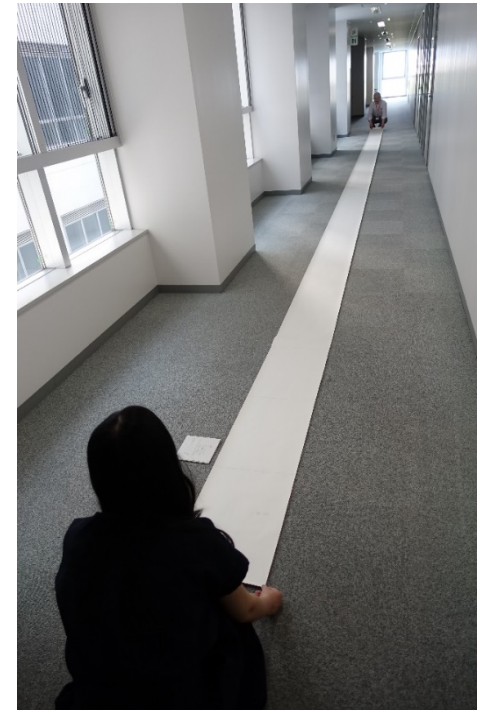
7月19日(木)



なんとこの疑問を解き明かすべく、すべてを繋げた長さの紙を作ってみました、という入口先生。すごい行動力です……。

あまりにも長いので、廊下を使って広げてみることにしました。

国文研の長い無機質な廊下を広げられた長い紙……他の先生がご覧になったら、さぞ不思議だったでしょう。



とてもシュールな光景でしたが、大変よく分かりました。長い！さて、このような大きな紙に書く日記というのは、普通男性貴族の日記です。男性貴族の日記とは、基本的に感じたことや考えたことを書くというよりは、その日の記録です。宮廷行事や社会の出来

7月19日（木）

事、誰と会ったかなどを記録しておくことにより、未来の自分や、家の子孫が参照することができるようにしているのです。そういった性質の文章なので漢字を使い、立派な大きな紙に書くのです。

それでは女性の日記はどのような紙に書くのでしょうか。

たとえば『十六夜日記』や『紫式部日記』、今では三大随筆として数えられる『枕草子』も、「草紙」に書かれます。草紙とは冊子です。冊子は小ぶりで真四角のものが多く（柘形本といいます）、手元に置いて簡単に書き付けることの出来る気楽な冊子という性格です。女性の日記は、人と交わした和歌やそれにまつわるエピソード、その時の想いなどが綴られた、叙情的な内容が多く見られます。こういった内容の文章は、現代と違い記録としての価値を認められていな



かったので、個人的なもの、あるいは仲間内で楽しむものとして、気軽な形式で書かれたのでしょうか。

しかし『土佐日記』といえは有名な「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」という冒頭文。紀貫之が女性に仮託して、仮名文字で書いた日記のはず……事実、男性の日記には見られない、細やかな心の動きが綴られており、女性として書かなければそのような描写は難しかったでしょう。

それにもかかわらず、貫之は男性の日記と同じ形式の紙に書きました。彼にとって日記は正式な紙に書くべきものという意識があったのでしょうか。

ところが時代が下ると、『土佐日記』も他の女性の日記と同様に柘形の草紙に書かれるようになります。貫之直筆の『土佐日記』についての記録を残した藤原定家（鎌倉時代）も同様でした。この頃には女性の書いた日記や随筆、物語に文学的価値を見出しており、それらがひとつのジャンルだと考えられていたのでしょうか。『土佐日記』もその内容から、女性日記と同じ形式の草紙に書き写すべきだという意識になっていたのかもしれませんが。

どのような人に、どのような意識でかかれたのか。違う時代の人たちにはどのように受け取られていたのか。本の形からこれほど豊かな情報を読み取ることができるのですね。

古典作品に接するとき、書かれている内容が読めなくても、是非

7月19日（木）

一度原本をご覧いただきたいと思います。その後活字や現代語になったテキストを読む時に、とても豊かな読書体験ができるのではないのでしょうか。

梁さんも、初めて触る古典籍に興味をしめされ、様々な時代における文学や書籍の享受の在り方などについて、沢山の質問をしておられました。

複製も活用した体験型ワークショップは、私にとっても印象的なものとなりました。

